

## 7 建築家の苦楽

### 7.3 建築家の喜び、 コンペでの勝利-2

次のコンペに勝利したのは、1994年の春だった。バンダイのアメリカ本社ビルのデザイン・ビルト（設計施工）のコンペだった。

コンペには、日本の大手ゼネコン3社、鹿島建設、清水建設、そして竹中工務店が参加した。鹿島建設は自社の設計部、清水建設はアメリカの大手の建築設計事務所と組み、そして、竹中工務店は、私の事務所が設計を担当することになった。

バブルがはじけた後、竹中工務店はアメリカ本社の設計部を閉めていた。それで、私の設計事務所と他のアメリカの設計事務所の3社でコンペを行い、私の事務所が選ばれたのである。私は、積木のオモチャのイメージと風水学を取り入れた。バンダイの社長は風水学に凝っていたのでコンペに勝つことが出来たのかもしれない。

その案が具体化されることになり、私は基本設計をまとめ、市の建築課に提出して認可を得た。同時に日本のバンダイの本社にも提出した。バンダイアメリカ本社の方ですべてが決定されるというはずであったが、設計が進むにつれて、日本のバンダイ本社から強い意見が出てきた。その意見は、市の開発規則やアメリカの建築法規を無視する様な意見だった。日本で、同じ様な建物が建てられたのだから、アメリカでも建てられるはずだ、とバンダイ本社は強硬だった。「タマゴッチ」というオモチャがたいへんなブームになっていた頃で、バンダイはたいへん強気であった。大きな設計変更となった。敷地には沢山の木

バンダイアメリカ本社ビル全景、事務棟はシンプルな3階建ての長方形の箱となり、円形のガラスのアトリウムが入り込んできている。



南カリフォルニア、サイプレス市に建つバンダイアメリカ本社ビル、  
1994年設計

を植えて建物や駐車場が森の中にある様にとの市の開発地区の規則となっていたがバンダイは出来るだけ木を植えないように、特に建物の周りには芝生だけという

沙汰があった。私はランドスケープアーキテクトを雇う前にバンダイ本社の意図するところの案を作り、市を説得しなければならなくなった。

私はかつてランドスケープアーキテクト事務所で働いたことがあるので、難しくはなかったが市の規則に反した無理な注文であった。南カリフォルニアであっても四季が味わえる様ないろいろな木々を植え、市から要求されている木の大きさを倍の太さにして木の数を半分にすることで市から承諾を得ることが出来た。

エンターテインメント産業のバンダイはロビーを3階吹き抜けの大きなアトリウムにして、いつでもそこで大きなパーティーが出来るような空間を望んだ。

ガラス張りの円形のアトリウムが南側に面し、屋根全体がガラス張りとなる案となった。カリフォルニアの省エネ法にとっては太陽の熱を真向いから受ける最悪のコンディションである。このガラス張りの温室の

ようなアトリウムを通常にエアコンを使わずに夏でも常に涼しくしておかなければならない。私はアトリウムの中の空気を常に動かすことを考えた。アトリウムの下の方の細長く横に伸びた窓と上部の窓を温度が上昇するにつれて、それらの上下の窓が自動的に開くようにした。サイプレス市は海の近くであったこともあり、外気は比較的涼しく、暖かくなった空気は自然とアトリウムの上へのぼり、これらの窓を開けるだけで涼しい空気が循環した。又、スワンクーリングと言う、水だけの冷却装置で床にメタルの筒を立てて水温の涼しい空気を床の下を通してアトリウムに流出できるようにもした。

構造の問題は自由な大きなアトリウム空間を作るために、中心にあった柱を切り取り、ガラスの屋根が宙に浮くような構造にした。切り取った中心の柱を周りの柱でワイヤーで吊る方法を考えた。ポートルスと言い、それは張力によ

柱を地面で支える代りにワイヤーで二重のガラスの屋根と屋根梁を支えるその柱を空中で吊った。鉄骨の圧縮とワイヤー、弦の張力による構造体である。





ドアの上に作られた細長い窓はアトリウムの温度が上がると自動的に小さなモーターがクランクで繋がれた折れ曲がった横に伸びたパイプをまわし、ギヤーが一斉に動き、窓を外に押し出すように開けられる。

り、ガラスの屋根や鉄骨などの自重を弓の弦の原理で太い12本のワイヤーで屋根全体を吊り上げたのである。

音響の問題として、このアトリウムはすべてが硬い反射板の材料と円形の空間なので、反射音のことも考慮しなければならなかった。その上、すべてが真っ白の材料を使うことになった

ので、直射日光をどのように対処するか、夜のパーティーの時のライトの施設なども考えなければならなかった。

バンダイジャパンの要求を満たし、しかもアメリカの建築法規に違反しない、設計をどの様にするか、市の建築課をどの様に説得するか、一緒に働くプロジェクトのエンジニア達との共同作業を、どの様に進めていくか、多くの複雑で、面倒な問題をかかえることになった。設計以上にこれらのコーディネーションが難しいものとなった。

新しい案の基本設計がだいぶ進み、日本のバンダイ本社と竹中工務店の本社で、ミーティングをすることになり、私は日本へ行くことになった。複雑になった設計を仕上げるための過密なスケジュール、それに過労が重なり、私は体調が悪かった。そして私は日本へ出発する前に、夏風邪をひいた。

その夏の東京は、観測史上、最高温度を記録する程の暑さが続いていた。湿度も高く、スモッグもひどかった。その上、ミーティング中に、その頃、日本人はあたりかまわずタバコを吸った。私の一番弱い気管支と肺にとって、最悪の状態だった。冷や汗が出、咳が出、たいへん苦しかった。それでも朝から晩までのミーティングに参加し続けた。厳しい3日間のミーティングを、なんとか乗り越えることが出来た。

丁度、お盆の時期だったので私の田舎に行き、父の墓参りに行くことにした。墓は、村はずれの丘の上にあった。歩いて皆でその墓地に行ったが猛暑の事もあって私の病状が悪化し、呼吸が苦しくなって、ほとんど歩けなくなった。兄や妹は、日本で少し静養していくように、と言った。しかし、私は彼らが引き止めるのもきかず、飛行機に乗った。沢山の設計の仕事が、山積みになっている。このまま日本に留まって、兄と妹に世話になっているわけにはいかなかった。この病気も、アメリカに戻れば何とかなるだろう。とにかく、アメリカに戻らなければ、戻らなければ、という必死の思いであった。

離陸してから、気圧の変化もあって、私の病状はますます悪化した。フライトアテンダントが酸素マスクを付けてくれた。しかし、気管支が細くなっている感じで、さらに苦しくなった。ほとんど客がいなかったファーストクラスのキャビンに連れて行かれた。酸素が脳に回らないのでほとんど歩けない状態だった。幸運にも、飛行機にはドクターとナースが乗り合わせていた。



あの時も ANA にはお世話になった。九死に一生得た気持ちであった。人生において何度か死ぬ思いをしたことがある。この時もそのひとこまであった。

ドクターは、私の症状を診察して、言った。“私はドクターでも整形外科医なので、詳しい病状については、分かりません。しかし、死ぬことはないでしょう”、そう言いながら、機内にある緊急用の注射をしてくれた。機長も心配してやって来た。“ハワイに緊急着

陸の準備をしますか?”、“ロサンゼルスまでは、なんとかもつでしょう”とドクターが言った。

朦朧とした意識の中で、私は機長とドクターのやりとりを聞いていた。きれいなフライトアテンダント達が入れ替わり立ち代り、看護に来てくれた。死ぬというのは、こういうことか、と私は思った。しかし、ここで死ぬわけにはいかない。私には、やらなければならないことがある。それに、まだ残された建築の夢があるのだからと思っていた。

ロサンゼルスのアéroportには、救急車が待機していた。私は飛行機から直接救急車に乗せられると、病院へ直行した。救急病院で、急性肺炎と診断された。“今は命に別状はないでしょう。しかし、早いうちに専門医に診てもらう必要があります”と言われた。命に別状はないということでその日の午後に、退院となった。実にアメリカ的な措置だった。

翌日、日系人の専門医に診てもらった。“あなたは日本でいうところの根性という言葉で、生きて帰ってくることが出来た。実に、危ないところだった”と言われた。ペニシリンの注射をして肺炎を治療し、吸入剤器を毎日20分程、口にあてて、気管支をきれいにするようになった。黄色い痰が、はきでる様に出た。当分は、静養する様に言われた。しかし、その日から事務所に行って、働きだした。そして、又、スポーツカーに乗り、ミーティングに行き、工事現場に行き、ロサンゼルスのフリーウェイを走りまわりだした。

その後、竹中工務店のアメリカ本社の部長に会った時のことである。彼は、私が病気だったことを知って、驚いた。彼は見舞いの言葉など一言も口にせず、言った。“体に気をつけてもらわないと困る。設計が終わる前に、クタバラレタラ、我々はどうなるんだ！、

やはり大きな設計事務所を雇えばよかった! ”、当たり前のことかもしれないが、彼らは企業第一なのだ。この部長とは、気があわず、設計上のことでよく口論をした。何度もクビになるような破目にあった。

その当時（1994年）、私の事務

カリフォルニアでは車のナンバープレートの名前を自分で選ぶことができる。ARCHIT（建築家）という名のプレートを得ることが出来た。



所では、ほとんど手描きで図面を作成していた。私は、手描きの図面なら誰よりも正確に、早く、きれいに描ける自信があった。“今時、手で図面を描いている設計事務所なんてないヨ”と彼は、大きな声で皮肉を言った。“少し待って下さい。私の事務所でも、コンピューターで図面を描く様にします。そして、どこの事務所よりもきれいな図面を描いてみせます”。

死ぬような目にあいながらも、ともかくバンダイのアメリカ本社ビルは完成した。バンダイアメリカ本社ビルのグランドオープニングパーティーがそのガラスのアトリウムで盛大に行なわれた。バンドが入り、クラシック音楽が演奏された。演奏の音色も綺麗だった。日本から来たバンダイの若い社長のスピーチも音響には問題なくよく聞きとれた。照明のライトも問題なく操作できた。うまく多目的ホールが出来上がった。

このビルが竣工して間もなく、竹中工務店のアメリカ本社、支社、すべてが閉鎖された。日本のバブルがはじけて、日本の大手のそして中堅のゼネコンのアメリカ支社は次々と閉鎖されていった。竹中工務店の部長が、日本に帰る前に、私の事務所に挨拶に来た。その時、私はコンピューターで図面を描いていた。“井上さんは、スゴいなあ！”そう言って、部長は驚いた。

“いろいろ有難うございました”、私は部長にお礼を言った。“とんでもないこちらこそ、お世話になりました”と部長は言った。“それにしても、井上さんはいいな、自由で好きなことができてる。”他人のことはよく見えるのかもしれない、私だって大変なんだと、言いたかった。彼等は日本本社に呼びもどされると、どんな待遇が待っているかわからないのだ。クビにはならないにしても、出向させられるのかも知れない。もうゼネコンには、あのバブルの時の勢いと、華やかさはなかった。

バンダイアメリカ本社ビルの  
オープニングパーティーの夜。  
昼となく、夜となくアトリウム  
の中は素通しで見られた



[www.kiparchit.com](http://www.kiparchit.com)